

沖縄住宅考

<4>

共に住まう

③

同居を得意とする者が、世帯が互いの顔を確認しながら建築設計から工事落成まで、管理などに共同で携わっていくコープ住宅。入居の汀良町にも建ち、八世帯が既に入居して生活を営んでいる。ひめゆりに先立つたのはコープネット業務。住まいづくりの主体にはならないが裏方として施工をサポート、または全体の調整作業をし、コープ住宅建設の水先案内人的な役割を担うものだ。

那覇市安里のひめゆり通り沿いに建つコープ住宅と、自体がシミュレーションとして既にあった。プランに

の汀良町にも建ち、八世帯が既に入居して生活を営んでいる。ひめゆりに先立つたのはコープネット業務。住まいづくりの主体にはならないが裏方として施工をサポート、または全体の調整作業をし、コープ住宅建設の水先案内人的な役割を担うものだ。

那覇市安里のひめゆり通り沿いに建つコープ住宅と、自体がシミュレーションとして既にあった。プランに

コープ住宅はまだ普及の途に就いたばかり。コープネットに就いたばかり。コープネットに関する社会的なノウハウの蓄積がない中で、コープネットは模索を開始。コープネットは模索を開始。コープネットは模索を開始。



緑豊かな眺めが得られるコープ住宅の外観全景



建物の北側部分。各戸をスライドさせた工夫がうかがえる

募集の金融機関との交渉が大きな柱。一方、入居者が先介紹したひめゆりの「地主」サイドでも建設組合住宅と同様に、住まいを組織、八世帯の窓口を、得ようとする者が抱いて一本化して、コープネットと、居住地として選ぶ土地組合の間でコープネット（首里）への愛着が、今回契約、設計管理契約ながらのコープ住宅を営み出す背景になったといえそう。その組合に加入したのは公務員に建設会社社員、団体職員ら。ほとんどが那覇市内のパートや団地に任んでいて、建設用地付近のマンションにいた人も。集まった人たちは皆「首里に住みたい」という希望を持って

.....
ヒンプンをしつらえ半戸外空間を創造した住宅

入居会員を計画募集

コープ建設の調整役 コープネット



日曜版

んぐ
間を求めて

がんばぐ

生活空間を求めて

沖縄住宅考

共に住まう

第一種住居専用地域に建つ汀良コーポラティブハウスは、入居する八世帯の平均して面積が八七・二平方メートル(二二六坪余)。地下を共有の駐車場で、四層建ての住宅が二戸、仲良く肩を寄せ合うように建っている。一階の住宅は地上部分が



一階の住宅へのアプローチ。それぞれの入居者の工夫が十分にかかえる

左右から個性的な“家の顔”

④ 直接、両サイドに分かれて、それぞれの玄関へアプローチする格好を取っており、二、四階は階段を上って各フロアに立ちは、個性

那覇市内で比較的緑の残る首里地区でも、汀良コーポラティブハウスのロケーションは、一段と恵まれた自然環境にある。住宅の前には欠かせない素材だといふことが分かる。

<5>

的な家の顔が左右両方から現れる。どの階をのぞいても無表情で統一された、ありきたりの集合住宅とは異なり、この空間がコープ住宅の持つハード面での大きな特徴の一つだ。

訪者にとっても楽しい配慮だ。これらの環境を、通洋工費は二倍ではない。だが管理を担当した具志清康さんは、手探りの中で進めてきたコープ住宅建設を振り返る。コープランが取り組んだのは、住み手の設計依頼で作業が始まるという、受注方式による従来の住宅建築の殻を破り、自主開発を目指した建築設計。今回のコープ住宅のコーディネート業務は、同社の企画の一つとして生まれたものだった。具志さんは、今後もコープ住宅建設にこだわらず「さまざまな企画を立てていき、その中にコープがあればいい」と話す。

開口部通じ光や風



“お隣さん”へは窓を開ければ気軽に声掛けができる

へ向ければ、コープ方式の建築は社会への影響をより強くする。那覇市内の住宅密集地域で、古い住宅を建て替えるように、道路に接持つ「地域の再開発事業」としての方向性にも期待しているケースがある。例えば、掛けている。



2階へは階段とともにスロープも取り付けられた

日曜版